

■平忠度 武将。歌人としても名高く、都落に際して、歌を藤原俊成に託した。

たいらのただのり

・ ・ ・ ・ ・ 1144＝ 「平家物語」によれば丹後守藤原為忠の女を母に、_平忠盛の子に生まれる。平清盛の末弟。

兄弟のなかで公卿(三位以上)に列しなかったのは、早逝した家盛を除くと忠度だけである。彼が生れたとき父忠盛は49歳、兄清盛は27歳、清盛の嫡男で忠度には甥にあたる重盛はすでに7歳に達していた。したがって官位昇進が遅れたのは、彼が傍流であると同時に若年であったためであろう。「平家物語」によれば、忠度は熊野で生れ育ったというが、これについても詳細は不明である。

・ ・ ・ ・ ・ 1153＝ 9歳：

保元の乱・ ・ 1156＝12歳：

平治の乱・ ・ 1159＝15歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1162＝18歳：

清盛太政大臣 1167＝23歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1170＝26歳：ようやく右衛門佐としての忠度の存在を確認しうる。

平徳子入内・ 1171＝27歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1178＝34歳：従四位上。

治承のデータ 1179＝35歳：清盛のクーデタで伯耆守となり、

源氏一斉蜂起 1180＝36歳：薩摩守に遷任する。「尊卑分脈」はさらに正四位下まで進んだとするが、最終位階を確認することはできない。
*治承・寿永の内乱期に入ると大將軍として各地を転戦する。この年、以仁王・源三位頼政の挙兵鎮圧、
続いて源頼朝追討のために東海道を下る。しかし富士川では戦わないで敗走し清盛の怒りを買う。

平清盛没・ ・ 1181＝37歳：_甥重衡らと尾張墨俣川に源軍を大いに破り名誉を挽回する。

・ ・ ・ ・ ・ 1182＝38歳：全国的凶作のために戦局が停滞するが、

後鳥羽天皇・ 1183＝39歳：*木曾義仲が北陸道から進撃をみせ、これを迎撃するため忠度も平氏軍の一員として北陸へ向かう。しかし義仲軍のために惨敗し、いったん帰洛ののち、こんどは丹波路へ追討に向かうが、あまりに無勢で追討の役を果すことができず、むなしく京へ引き返したという。平氏はついに都を落ちて西海へ向かった。忠度もこれに同行したが、途中からいったん引き返し、和歌の師藤原俊成に歌を託していったという。のち俊成が「千載和歌集」を撰進したとき、この歌の中から1首を選び、「読人しらず」として「さざなみや士賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな」の歌を載せたのであった。

・ ・ ・ ・ ・ 1184＝40歳：*鎮西に落ち着くことのできなかった平氏は、屋島に本拠を置いてしだいに勢力を回復し、摂津から京へ迫る勢いを示した。このため源義経の軍勢が追討使として西下し、一ノ谷で平氏軍を破って屋島へと追いやった。この一ノ谷合戦では平氏の主だった部将の多くが戦死したが、忠度もまた奮戦のすえ源軍の岡部六弥太忠澄と戦って討死した。その簞には「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵のあるじならまし」の歌が結びつけてあったという。